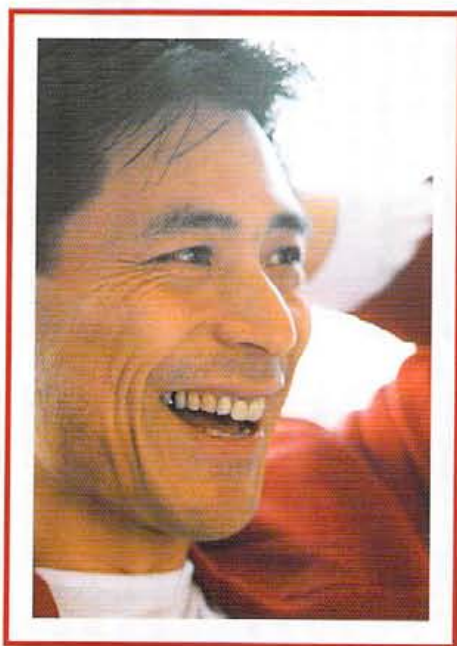


# 加藤健一

元気な役者です！



Kenichi Kato

ときどきフツと  
妙な気持ちになることがありますね  
役の真髄にふれた快感っていうのか

取材・文／あさかよしこ

写真／ハリイ中西

取材協力／新神戸オリエンタルホテル

時間の流れが  
わからなくて……

大震災の傷あとが、まだまだ生々しい神戸。少しずつ復興の兆しが見え始めたこの街に、3月末、被災地の心を潤す朗報が舞い込んだ。「がんばれ神戸！加藤健一事務所お見舞い公演」と銘打って、俳優の加藤健一が無料公演を行なうというのだ。演目は、マルク・カモツテ

イ原作のフランス・コメディWhat a Sexy Dinner!、場所は新神戸オリエンタル劇場。

「今回本当は中止になるはずの公演だったんですけれども、神戸ではもう何年も前から、年3回ぐらいのわりで公演させていたでいますから、なんとか無料でやらせてもらえないだろうかって劇場にお願いしたんですよ。そこで「いいでしょう」ということになって、

キャスト、スタッフ全員がボランティアで参加ということになりました。今この時に演劇を通じて、被災地の人々に「元氣」を受け取ってもらえたら、と思っっていますけれども。「元氣」……実はこの言葉、彼の演劇活動のキーワードなのかも知れない。

加藤健一事務所の所属俳優は、加藤健一ただひとり。キャストもスタッフも公演の度に

集い、そして解散する。毎年3本から4本の演劇を企画製作し、全国主要都市での公演の観客動員数は、年間8万人から10万人にもなるという。その加藤健一事務所が、今年で15周年を迎えた。

「らしいですね（笑）。こういう仕事をしていると、時間の流れがわからなくて……。この15年の間に、自分の中で変わった事……。どうですかね……。何かが変わっていくほど時間



を感じていないんですね。ただ芝居の内容でいうと、昔はやっぱり、メッセージの強い作品が好きでしたね。また若かったころは、ひとつの強いメッセージ、例えば戦争反対とか核反対とか、そういう政治的な意味をもつもの、それから身障者の問題とか、目に見えるものの問題意識みたいな事しかメッセージとして、自分で受け取れなかったんですね。」

昭和24年生まれといえは、学園紛争の嵐が日本中を吹き荒れる真只中で、青春を謳歌した、いわゆる団塊の世代。「メッセージ」とか「問題意識」という単語に、妙に敏感に反応してしまうのもこの世代である。

「若い時は、コメディを非常に軽蔑していたんですよ。あんなモノは……なんて(笑)。けれども、人と人を笑いでつなげあったりすることも、非常に大きなメッセージなんじゃないかって考えましてね。つまり大事なことは……」

「コーヒーをひと口飲むと、ちよっと居すまいを止して、」

「作家は書くことでお客さんにメッセージを伝えようとするとわけてすけれども、僕たち役者は、同じことを伝えようとするのはなくて、素直に役を演じていけば、作家の思いは自然にお客さんに伝わるものだと思うんですよ。」

「気持ちよく肩の力を抜いたこんな言葉の中に、やはり15年の歳月の流れが見え隠れする。」

「それじゃあ役者は、お客さんに何を伝えていくかという、僕は「元氣」というか……なんか子供っぽい言い方なんですけど、元氣の「元」みたいなものを伝えられたらいいなと思いますね。僕ら役者なんて、ふだんは酒ばかり呑んで(笑)、そんな偉そうなモンじゃありませんから。ただもう、何よりも丈夫で元

氣だから、舞台の上で台本に忠実に一生けんめい活動して、元氣のモトを注入する。そうして作家の考えた問題と元氣とを、お客さんに受け取ってもらえれば、演者としては最高じゃないかな。」

神戸のお見舞い公演の観劇希望者は予想をはるかに上回り、2日間で3ステージの予定を、急遽4ステージに変更しての公演となった。

「元氣」のモトは、小粋なフランス風のエスプリと共に、舞台から客席へ、そして客席から舞台へと、ゆるやかなキャッチボールのような効果を発揮したに違いない。

### つかさんの芝居はものすごく早いオープンカーに乗っている感じ。

赤いジャケットにジーンズ、ちよっと低めの響きのいい声。俳優というより「役者」、演劇というより「芝居」という言葉の似合うひとである。

その芝居の世界に入ったのは19歳の時。

「高校時代も演劇部でしたけど、応援団にも入ってましてね。硬派と軟派がいっしょなんですね(笑)。ほかに楽器とか絵も好きでしたから、何かを表現することが好きなんです(笑)ね。」

卒業してからは経済的な事情で、一応就職はしたものの、

「デスクワークが苦手なんです。毎日遅刻して行ったら半年くらいでクビになりました(笑)」

翌年の春、上京して俳優小劇場の養成所を受験、そして合格。

「でも、これで食べていこうっていう自信なんかなかったですね。はじめは、役づくりとか自分をさらけ出すという、役者の内側の本質的な部分よりも、有名になるとか人に見られるという、外側のものに魅力を感じて入ったものですから、人前で生身の身体をさらしていくことが非常に恥ずかしかったですね。3年くらいたってからかな、いろいろわかってきて恥かしくなくなると、本当の意味で芝居が好きになったのは。」

やがて仲間3人と劇団「新芸」を設立し、そこで「熱海殺人事件」など、つかこうへいの作品を上演。これがヒットした。

「客席が50くらいのところをやったんですけど、そのころの僕たちにとっては芝居でも大ヒット、超満員!(笑) 劇評もよくて何度も再演しました。」

そしてこの事がきっかけで、つかこうへい事務所公演に客演するようになった。

「ものすごい勢いで客が増えている時期で、つかさんの筆の力もまた、追い風に乗りかかっていくみたいに、ものすごい勢いがある、おもしろかったですね。自分たちを見る世の目がどんどん変わっていく……すごい速いオープンカーに乗ってるみたいな感じなんです(笑)」

風間杜夫、平田満、三浦洋一などが、触れれば弾けるような強烈なエネルギーを舞台から発していたころのことである。

「一番驚いたのは、ほくはそれまで新劇という世界で、テネシー・ウィリアムズとかアーサー・ミラーとか、名作といわれる戯曲を、役者としてどう読んでいくのか、というところが、役作りを教わってきたんですね。ところが、つかさんの場合は、大衆演劇の方たちの手法





で、口立て芝居っていいまして、稽古場でつかさんが一人にセリフをつけていくんです。ほくらはそれを一瞬にして覚えていくわけです。今日どう展開するのか分からないし、このあと誰が主役になるのかもわからない。台本が出来上がるのは初日(笑)。その上、楽日まで毎日セリフを替えていくんですよ。昔のシェイクスピアのように。おもしろかったですけど、ある面では非常にとまどいましたね。

やがて、つかこうへい事務所は、つかこうへい自身が小説家に転身することで解散。

「つかさんは、たぶん大勢の人を背負っていくのに疲れたんでしょうね。小説ならひとりでできるから。」

それぞれがみんなひとりにもどって、それぞれの道を歩き始めた。

加藤健一事務所を設立したのは、彼が30歳の時。年間2本の新しい演目を見つけるために、一年に200冊以上の戯曲を読む。

「旅公演の時に集中して読んでますね。朝から晩までほとんどヒマですからね。夕方チョコット芝居するだけで。アツ怒られちゃうな(笑)。日本のもの、外国のもの、手当たり次第読んだ中から、完成度の高い芝居、僕のできる芝居を選んでいきます。例えば今の僕に18歳の少年の役はできませんから、そういうものは選ばないとかね。」

社会状況などの、時期的な風を読むことも、本遊びの大きな課題になる。

「僕らが芝居を始めたころは、ホモセクシユアルの芝居は敬遠される状態でしたから、やっぱりも仕方がないということで、あまり取り上げませんでしたね。最近は随分受け入れられるようになりましたけれども。今ですと、例

えばエイズの話。アメリカには今いっぱいありますよね。日本でもそれらの本は感動するように書かれてはいるんですけども、まだまだやってもわからないというか、エイズに対する問題意識がちゃんと定着していない状態ですから、まだちょっと早いかなあと思ってるんです。そのうちにだんだんやるようになるでしょうね。あとは…黒人の話は最近理解しやすくなっていますけど、アメリカの中のエルトリコ人っていうのは、日本ではちょっとまだわかりにくいですから、やらないうようにしています。」

**セクシーって、異性じゃないとわからない。**

「芝居やってると、なんかフットと変な感じがする時があるんですよ。役の真髄にふれた時の非常な快感っていうんですかね。なかなかその辺、言葉では表現しにくいんですけど。役によって自分の何かが変わる、自分の中の何かを発見するというような状態なんですよ。うけどね。」

「芝居することの喜びは？とたずねた時の加藤健一の答えである。どこか妙になまめかしい。そこで男の色気、役者の色気について…。」

「それがおあつらえ向きに、今回の公演のタイトルは『ホワット・ア・セクシー・ディナイ！』なのである。」

「これわからないんですね(笑)。男の色気ねえ…。今共演している戸田恵子さんが、わかりやすい文章を書いていましたね。ダンスの好きな女優のアテッコすると思いますよ。その時、自分の一番嫌いなタイプの女優の名



前をいうと、それが当たりだつて(笑)。その逆の場合も当てはまるらしいですね。つまりそれはどうということかというところ、所詮セクシーっていうのは、異性にしか解らないということなんじゃないですか？だから男なんて、女性にモテようと思つて一生懸命がんばって見当違いなことをしてるんですよ(笑)。だから面白いんですけどね。手ごりだから…とすれば、男性として加藤氏がセクシーであると感じる女性は、どんな女性なのだろうか。

「ウーン、なかなか…ひと言では言いにくいですがネエ…ウーン(笑)。女性と女優というのも違いますしねエ。今度の芝居でも、僕の奥さん、愛人、愛人とまちがえられる女コックと3人の女性を、それぞれステキな女優さんが演じているんです。ああいう女性が現実にはいたら、それは非常に魅力的だと思えますけど、でも一旦女優として見ちゃうと、この人たちといっしょに生活したら疲れるだろうな、なんて(爆笑)。」

「単純にキレイっていう男優さんもおりますよ。華のある役者という言葉もある。」

ね。それはそれで華だし色気だと思えますよ。それから、お客さんの呼吸とか、お客さんの発している気とかをフット感じて、それをつかめる人が華があるように見えるんですよ。ね、たぶんね。それが役者の色気に通じるんじゃないかなあ。」

実はこの時の取材の席に、彼はびっくりするような美少年を伴って現れたのだ。ナントその美少年は、息子さんなのだという。色気についての話になった時に、こころなしか菌切れが悪くなったのは、そのせいだったのかも。3月はじめ雪の日、東京・本多劇場の開演前のほの暗いロビーを、彼は黙々と走っていた。額の汗とまっすぐ前を見据えた目に、凄味のような色気があった。

**遊びながら生きて行ければ最高！**

俳優には二つのタイプがあって、一つは自分の素材を使って役を映じるタイプ、もう一つは自分の方から役に近づいて行って、その役になりきろうとするタイプ。彼はどちらの

# 加藤健一



93年3月  
「パパ、I LOVE YOU!」



91年10月  
「審判」



91年12月  
「ブラック・コメディ」



95年3月  
「ホワット・ア・セクシー・ディナー！」

## 加藤健一プロフィール

■1949年10月31日 静岡県豊浜に生まれる。■1968年 劇団俳優小劇場の養成所に入所。■1969年 卒業後、劇団新芸を結成。上演を続けるかたわら、新芸で「熱海殺人事件」を上演したのをきっかけに、つかこうへい事務所の作品に多数客演。■1980年 「審判」上演のため、“加藤健一事務所”を設立。■1991年 加藤健一事務所・江戸田スタジオを開設。■1993年 「三人姉妹」にて、加藤健一事務所公演初演出。

■受賞歴 1982年 第17回紀伊國屋演劇賞/1988年 昭和63年度文化庁芸術祭賞（『第二章』）/1889年 文化庁芸術選奨文部大臣新人賞/1990年 平成2年度文化庁芸術祭賞（『セムタイム・ネクストイヤー』）/1994年 平成6年度文化庁芸術祭賞（『審判』）ほか多数



# 加藤健一

タイプなのだろう。

「ウン、これは職業的なことで、とても説明しにくい事なんです。だからわかってもらうために役者は、ケース・バイ・ケースでいろんな言い方をしますね。実はこの二つは同じことなんですよ」。

それはどういう事なのかと少し構えると、ニヤリと笑って、

「役になりきるといっても、人殺しの役で本当に人は殺せませんよ。だから、役になりきるといふことはありえないわけです。じゃあどうするかといったら、非常にそれに近いところまで自分を追い込んでいって、その分だけ逆の方向にも距離を取って客観視していく。精神分裂みたいなものですかね。役の中に入っていく自分と、それを遠くから細かくコントロールしていく自分に分かれていくわけですから。だから人を殴るシーンでも、体はコントロールされていますから、相手の1センチぐらい手前で止めますけれども、感情は殴ってるんです。舞台の上では200パーセントで生きているような感じですね。ですから、さっきの二つのタイプっていうのは同じことだし、どちらも本心なんです」。

その200パーセントのバイタリティーで、

演じてきた彼のステージリストを振り返ると、

加藤健一、事務所設立のきっかけとなった「審判」に始まって、「寿歌」「コレクター」「セイムタイム・ネクストイヤー」「キングリチャードIII」「第二章」「BENT」「おかしな二人」「カッコーの巣の上を」「フラック・コメディー」……と、そのジャンル幅広くに驚かされる。

「そう……ですかねえ。あのう、だからという訳ではないですけど、TVでは本当にクセの強い役をやらされますねえ(笑)。映像と舞台、彼にとつてそれは全然違うのだから」。

「まず、ものを作る時間の単位が全然違いますね。TVは、1日けいこして翌日本番。それが僕には早過ぎて、どうもなじめない。映画は、一カ月以上かかって撮るから比較的いいんですけど、圧倒的に監督のものだから、役者の立ち入るスキがない。舞台の場合、カ月前半時間をとって、その中で作っていく方がいいので、ストレスがないんです。同じ時間の流れがあるとすれば、舞台の方がおもしろい。見てくださる方にとつては、どちらでも同じなんです。作るとしては、あわてて役をつくっていくと、なんか身を削ってるような気がするんです。だからTVをやっていると仕事をしているっていう感じなんです」。

すけど、舞台をやっていると、遊んでいる感じがするんですよ。できれば、遊びながら食べて生きていければ一番いい事じゃないですか(笑)。それが理想なんです」。

## ほんの少しだけ 運命論者かも

加藤健一の次の「遊び」は、7月公演に決定した「松ヶ浦ゴドー戒」。15年ぶりのつかこうへい作品になる。寂れた田舎町に巡業にやってきた講釈師・一座の物語。彼が演じるのは講釈師・重蔵。

「ほとんど一人芝居みたいなものですが、一時間半ぐらい七五調でしゃべり続けるんですよ」。

そして8月には彼の演出による空組旗上げ公演「銀河鉄道の夜」(作・北村想)が控えている。空組とは、1986年に創設した加藤健一事務所・俳優教室の卒業生によるプロジェクトチームである。

これはまずいな、ちゃんと活字から感情を起こすという作業を、生徒たちと一緒に確認していきたいと思ってる教室なんです。その卒業生が今年で10期生になったものですが、うちの教室から巣立って、今プロの予備軍のような形で、あちこちで活躍している子たちと、10年を日処にもう一度やってみたいなと思つたものです。空組という名は、教室の時の名前が桜組で、その桜が舞い上がるから空組(笑)。

この役者の「元氣」は、今も上へ上へと昇っていく。

「事務所を大きくしたいなんて思うと、どうしても利益がからんできたり、肩に力が入ったりしてしまうので、あまりリキまずに、自分が生きている中で一番楽なところを捜して、いつもそこにいるようにしたいですね」。

もしかしたら運命論者か？

「運命論者といえはそうかもしれませぬ。人間の生まれ変わり、宇宙と人間との関係に、とても興味がありますし、漠然とですが信じています。そして今思うことは、お客さんのためではなくて、自分のために、自分の居やすい世界でのんびり「元氣」していきたい。子供のころ、一日中楽しかったように」。

次回7月公演 「松ヶ浦 ゴドー戒」

